

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

なぜトルコ語の疑問詞と焦点小辞は共起しないのか

Why do the interrogative words and the focus particle  
not co-occur in Turkish?

林 徹

HAYASI, Tooru

## なぜトルコ語の疑問詞と焦点小辞は共起しないのか<sup>1</sup>

林 徹

【キーワード】トルコ語 疑問詞 焦点小辞 不定表現 選択疑問文

### 1. はじめに

疑問詞と不定表現（例えば不定代名詞）との間に密接な関係があることは、以下に示す日本語の疑問詞 (1a) と不定表現 (1b) の間の形式上の類似、あるいは、ドイツ語の疑問詞 (2a) と不定表現 (2b) の間の形式上の類似を見れば、あきらかなように思われる。

(1a) なに, だれ, どこ, いつ, どう

(1b) なにか, だれか, どこか, いつか, どうか

(2a) was 「なに」, wer 「だれ」, wo 「どこ」, wann 「いつ」, wie 「どう」

(2b) irgendwas/etwas 「なにか」, irgendwer 「だれか」, irgendwo 「どこか」, irgendwann 「いつか」, irgendwie 「どうにか」

Lyons (1977) は、疑問詞と不定表現との間のこのような形式上の類似が、英語、フランス語、ロシア語、ギリシア語、ラテン語に見られること、特に（古典）ギリシア語では疑問詞と不定代名詞とが同形であることを指摘している。さらに、このような平行性の根拠のひとつが、(3) のような疑問詞疑問文が (4) のような不定表現を含んだ文を含意しているからだとする。

(3) Who left the door open?

(4) Someone left the door open.

(Lyons 1977: 758)

<sup>1</sup> 草稿の段階で編者のひとりである菅原睦氏より貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝する。

Lyons (1977) の観察に基づいて、疑問詞の本来の働きが指示対象の不定であることを表しているのではないか、という主張も可能である。例えば Wiese (2002) は、「質問」という語用論的機能が疑問詞に由来するものではないことを主張する。

本稿では、以上であげたような、疑問詞と不定表現との間に予想される密接な関係が、少なくともトルコ語については成り立たないこと、むしろ疑問詞疑問文と選択疑問文の間に平行性が見られることを指摘する。

## 2. トルコ語の疑問詞と不定表現

トルコ語<sup>2</sup>の疑問詞と不定表現の間には、第1節であげた言語に見られたような形式的な平行性を見出すことができない。

- (5a) ne 「なに」、kim 「だれ」、hangi 「どれ」、nere 「どこ」、nasıl 「どう」、kaç 「いくつ」  
 (5b) bir şey 「なにか」、biri/birisi 「だれか／どれか」、bir yer 「どこか」、bir şekilde 「どうにか」、birkaç 「いくつか」

以上から明らかなように、トルコ語の不定表現は数詞 *bir* 「一」を含んでいる。第1節であげた言語の一部でも、「一」を含む不定表現が見られる（例えば、英語の *someone*、フランス語の *quelqu'un*）。一方トルコ語の疑問詞は、(5b) にあげた不定表現 *birkaç* 「いくつか」に疑問詞 *kaç* 「いくつ」が含まれていたり、*kimse* 「だれか（疑問文で）／だれも（否定文で）」、*kimi* 「或る～」に疑問詞 *kim* 「だれ」が含まれていたりする例がないわけではないが、不定表現との間に平行性を示すとまでは言えない。

## 3. トルコ語の疑問文

トルコ語の疑問文は、いわゆる疑問詞疑問文（wh-疑問文）と極性疑問文（yes/no疑問文）におおまかに分けることができる。前者は第2節で紹介した疑問詞を含み（例文 6）、後者は疑問の enclitic *mi/mi/mu/mü* を含む（例文 7）。

- (6) Kim geldi?  
 だれ 来た  
 「誰が来たか？」

2 本稿で用いたトルコ語の例文、およびその容認度の判断は、2016年と2017年の筆者のイスタンブール滞在中に、Sümeyye Gülrenk氏（女性、大学院修士課程在学中、Istanbul生まれ）、Efdal Aydın氏（女性、大学学部4年在学中、Siirt生まれ）に教えていただいたものである。ここに記して感謝する。

- (7) Ali geldi mi?  
 アリ 来た か  
 「アリが来たか? / アリは来たか?」

本稿では疑問の *enclitic* を「疑問小辞」と呼ぶことにする。疑問小辞は、文末だけではなく文の成分の直後に置いて、その成分を焦点とする焦点疑問文を作ることができる。

- (8) Ali mi geldi?  
 アリ か 来た  
 「アリが来たか? (来たのはアリか?)」

また、疑問の焦点となる句を複数並べれば、以下のような選択疑問文ができる。

- (9) Ali geldi mi (yoksa gelmedi mi?)  
 アリ 来た か あるいは 来なかった か  
 「アリは来たのか、(それとも) 来なかったのか?」

- (10) Ali mi (yoksa Fatma mı geldi?)  
 アリ か あるいは ファトマ か 来た  
 「アリあるいはファトマのどっちが来たのか?」

上の例のように、接続表現 *yoksa* は任意であるが、(9) の場合はないほうが、(10) の場合はあるほうが一般的である。

#### 4. トルコ語の焦点小辞 *da/de*

トルコ語には、ほぼ日本語の「も」に相当する *da/de* という *enclitic* がある。文成分の直後に現れて直前の句が焦点であることを表す。*da/de* を本稿では「焦点小辞」と呼ぶことにする。<sup>3</sup>

---

<sup>3</sup> 焦点小辞には、*da/de* 以外に、*bile* 「さえ」、*dahi* 「さえ」があるが、本稿では扱わない。

(11a) Ali geldi.

アリ 来た

「アリが来た。」

(11b) Ali de geldi.

アリ も 来た

「アリも来た。」

焦点小辞 *da/de* は常に「も」に対応しているわけではない。文末に現れ、「確かに～ではあるが」といった意味を表すこともある。しかし、本稿ではそのような用法には立ち入らない。いわゆる *additive* と言われる典型的な用法のみを対象とする。

やや長めの文で 焦点小辞 *da/de* が現れる位置を示すと (12) のようになる (★ の位置に置かれることが可能)。

(12) Ali ★ bugün ★ evde ★ çocuklar için ★

アリ 今日 家で 子供たち ため

çorba ★ pişirdi.

スープ 調理した

「アリは今日家で子供たちのためにスープを作った。」

実は、第3節で紹介した疑問小辞も ★ の位置に現れることができる。つまり、焦点小辞と疑問小辞は、文中の同じ位置に現れる (文末や述語中では、焦点小辞と現れる位置が異なる)。

## 5. 疑問詞と共起しない焦点小辞

第3節で見たように、トルコ語の2つのタイプの疑問文 (極性疑問文と疑問詞疑問文) は、疑問小辞の有無で区別できる。この点では、以下に示すように、疑問詞疑問文は不定表現を含む平叙文 (非疑問文) と同じである。

(13a) Ali geldi mi? (=7)

アリ 来た か

「アリが来たか? / アリは来たか?」

(13b) Kim geldi? (=6)

誰 来た  
「誰が来たか？」

(13c) Biri geldi.

だれか 来た  
「だれかが来た。」

これを観察すれば、疑問詞と不定表現の間に形式上の類似がほとんど見られないものの、トルコ語においても、疑問詞と不定表現の間には構文上の平行性があると言えそうである。しかし、第4節で紹介した焦点小辞の分布に関して、疑問詞と不定表現とは違った環境として働くことがわかる。

(14) Biri de geldi.

だれか も 来た  
「だれかも来た。」

(15) \*Kim de geldi?

だれ も 来た  
「(予想される意味) 他に誰が来たか？」

焦点小辞が疑問詞と共起できない<sup>4</sup>のは、(15) で尋ねようとしている内容が、質問の内容としてふさわしくないためなのだろうか。しかし、「すでにアリが来た」ことを知っている話し手が、「アリに加えて、さらに誰が来たのか」を尋ねる状況は十分想定できる。そのような質問として (16a) のような疑問文は可能である。問題は、焦点小辞を使うことができないという点にある。

(16a) Ali'den başka kim geldi?

アリより ほかに 誰 来た  
「アリのほかに誰が来たか？」

4 ただし、疑問詞疑問文であっても、*Kimler de geldi!* 「誰たちも来てるよ！(あんな人までが来ているよ)」のように、質問ではなく、いわゆる反語として使う場合には、焦点小辞が疑問詞疑問文に現れることが可能。

(16b) \* Ali'den başka kim de geldi?

アリより ほかに 誰 も 来た

「(予想される意味) アリの他に誰が来たか？」

(16c) Ali'den başka biri de geldi.

アリより ほかに だれか も 来た

「アリのほかにだれかも来た。」

また、(16c) からわかるように、疑問詞ではなく不定表現ならば、「すでにアリが来た」ことを話し手が知っている場合に焦点小辞と共起することに、何の問題もない。

では、(15) で焦点小辞が使えないのは、それが疑問文であることと関係しているのだろうか。(16a), (16b), (16c) の結果を見れば、そのような可能性が考えられる。しかし、極性疑問文には焦点小辞が問題なく現れる。

(17) Ali de geldi mi?

アリ も 来た か

「アリも来たか？」

そこで、疑問詞が疑問の焦点であることに注目してみる。疑問詞と焦点小辞が共起しないのは、疑問の焦点となっている文の成分を、さらに焦点小辞を使って焦点化することができないからと考えるならば、焦点疑問文では焦点小辞が現れないことが予想される。しかし、この予想は無残にも裏切られる。

(18) Ali de mi geldi?

アリ も か 来た

「アリも来たか？」

焦点小辞の後ろに疑問小辞が続くという制約はあるが、両者は問題なく共起する。

## 6. 選択疑問文と疑問詞疑問文

選択疑問文は、疑問小辞が現れるといった形式上の特徴に関しては、焦点疑問文を含め、極性疑問文によく似ている。しかし、このような形式上の類似にもかかわらず、焦点小辞の分布に関しては、以下のように、選択疑問文はむしろ疑問詞疑問文と同じパターンを示す。

(19a) Ali mi yoksa Fatma mı geldi?

アリ か あるいは ファトマ か 来た  
「アリか、あるいはファトマのどちらが来たか？」

(19b)\* Ali de mi yoksa Fatma da mı geldi?

アリ も か あるいは ファトマ も か 来た  
「(予想される意味) アリも来たのか、あるいはファトマもか？」

(20a) Kim geldi? (=6, 13b)

誰 来た  
「誰が来たか？」

(20b)\* Kim de geldi? (=15)

誰 も 来た  
「(予想される意味) 他に誰が来たか？」

(21a) Çay mı yoksa kahve mi içtiniz?

お茶 か あるいは コーヒー か 飲んだ (あなたたちが)  
「あなたたちはお茶を飲んだのか、それともコーヒーか？」

(21b)\* Çay da mı yoksa kahve de mi içtiniz?

お茶 も か あるいは コーヒー も か 飲んだ (あなたたちが)  
「(予想される意味) あなたたちはお茶も飲んだのか、それともコーヒーもか？」

(22a) Ne içtiniz?

何 飲んだ (あなたたちが)  
「あなたたちは何を飲んだのか？」

(22b)\* Ne de içtiniz?

何 も 飲んだ (あなたたちが)  
「(予想される意味) あなたたちは他に何を飲んだのか？」

Hayasi (1985) は、選択疑問文のかたちを取った質問も疑問詞疑問文のかたちを取った質問も、ともに *evet* 「はい」や *hayır* 「いいえ」、*yok* 「いや」を使って答えることができないという共通の語用論的特徴を根拠に、疑問詞は、選択疑問文における焦点成分 (19a における *Ali mi*

*yoksa Fatma mı*, 21a における *çay mı yoksa kahve mi*) に相当するのではないか、という仮説を提示した。さらに、このような想定は、疑問詞疑問文になぜ疑問小辞が現れないかを説明できるとした。焦点小辞の分布に関しても、選択疑問文と疑問詞疑問文に同じ特徴が観察されたことは、Hayasi (1985) の結論に矛盾しない。

## 7. 連言的命題と選言的命題

焦点小辞が表す意味は、おおまかに「Aに加えてBもまた～」と言える。これを「AかつBが～」と言い換えることもできる。一方、選択疑問文が表す意味は、質問である点を除けば、おおまかに「AまたはBが～」と言える。疑問詞疑問文も、具体的に選択肢が示されていないが、選択疑問文の一形態と見なすことができるだろう。

以上を仮定できるとすると、焦点小辞は連言的命題を、選択疑問文と疑問詞疑問文は選言的命題を内容として含む、とさらに考えることが可能になる。第5節と第6節で観察した、トルコ語の選択疑問文と疑問詞疑問文に焦点小辞が現れない現象は、連言的命題と選言的命題との共存に関する制約の問題として、捉え直すことができるのではないだろうか。

## 8. まとめ

本稿では、トルコ語において、疑問詞と不定表現の間ではなく疑問詞疑問文と選択疑問文の間に平行性が見られること、および、疑問詞疑問文と選択疑問文の平行性がいずれも選言的命題を含むことと関係していることを主張した。検討すべき現象はまだ多く残されているが、現時点でのまとめとしたい。

## 参考文献

- Hayasi, Tooru. 1985. Non-cooccurrence of the interrogative particle and interrogative words in Turkish. 『アジア・アフリカ文法研究』 13, 61–73.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*, vol.2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wiese, Heike. 2002. Wh-words are not 'interrogative' pronouns: The derivation of interrogative interpretations for constituent questions. In: Michael Hoey & Scott Nelia (Eds.) *Questions: Multiple perspectives on a common phenomenon*, 78–91. Liverpool: University of Liverpool Press.

## **Why do the interrogative words and the focus particle not co-occur in Turkish?**

Tooru Hayasi (University of Tokyo)

There are languages that display formal and semantic similarity between content questions (*wh*-questions) and indefinite expressions. I argue, however, that in Turkish content questions are likely to be parallel with alternative questions rather than with indefinite expressions. One of such parallelism between content questions and alternative questions is that both types of question contain a disjunction of possible answers. This is why they do not co-occur with the additive focus particle *da/de*, since the additive focus particle implies a conjunction between the focused element and something/someone else.